

# 創造の脈



と思うのですが。

絵の病院というのを開設しました。院長先生おいて、子どもの症状を診断し、親の話と総合して、ちょっととした絵の病気をなおしてやりたい、そんな気もちからです。この試み、実は子どもの絵を通して子どもを理解していきたいと思ったのですが、親の訴えを聞いてとても勉強になりました。つまり、子どもの絵に現われるさまざまな症状は、たとえば、粗雑概念的自信がない、想が貧しいなど、決して単独では現れない、子どもの生活そのものが「絵とおんなじだ」ということです。(後略)

「岩見沢・南小」



## 研究図書「色と形の認識と創造」の発行

札幌研中学美術研究部は、昭和42年より、「人間形成の過程における色と形の認識と創造」を研究主題として、共同研究を進めてきた。これは、その後9ヶ年の長期にわたって継続されたが、その内容と成果を見合わせ、最終的に集約するために、研究図書として編集研究部に組織された情報センター委員会に当研究部に組織された情報センター委員会によって検討され、50年秋の全体集会上に提案され部員の賛同が得られた。

●52年8月の「全国造形教育研究大会」をこの実践研究の発表の場と見え、そこではこれが授業の提言の骨幹となるような性質を持つたものでなければならぬこと、●その意味からも、単に経過を追うだけの経要的なものではなく、今後の研究の発展や方法を支えるものでなければならぬことなどである。

このようにして、以来、組織の機能の全てを注いで、実質2ヶ月に及ぶ編集作業が進められたのである。これは文字通り試行錯誤の積み重ねであったと言える。

研究推進委員会で練られ、提示された方向や方法が、常任委員会の検討を経て地区研究会におろされ、地区毎の授業研究、実践、検

証が重ねられた。その成果が次々と集約されていったが、編集構想作業の中で、研究の全体の流れからみつけた時に、また新たな疑問にぶつかったり、解決の手がかりが得られることもあり、それがさらに地区研究で追求された。編集にはさまざまな委員もとり、原稿執筆にあたった地区研究委員も含めて、そこに注ぎこまれた時間と労力、さらに思考の集積は筆舌に尽くしがたい。

こうして、10ヶ年にわたって取りこんできた、長期継続研究の最終的な集約として、研究図書「色と形の認識と創造」

美術科の教科性の確立と

「ゆとり」への志向

が、52年7月、明治図書出版株式会社より発刊された。初版千五百部、A5版、四頁。

●序論、美術科における今日術課題

●人間形成の過程における色と形の認識と創造

●実践的学力としての「高めたい力」とそれを伸ばす授業の展開

●美術科の学習と施設設備

●教育課程の改訂と美術科と論じられていく一文責 佐野千尋

# 本部



事務局次長 松島 輝男 (札幌栄南小)

この十年は、本部としての三つの大きな時期に分けて見ることができよう。

前和田委員長の後をうけて、①伊東将夫、高橋栄吉時代②高橋栄吉、辻悦平時代③辻悦平、森川昭夫時代(以下敬称略)

この三つの時代のそれぞれに特色があるうが、底に流れる本部のムードをよく表わしている文を少々長いが引用する。

(学校長(先輩の先生)の方々の陰の活躍に敬意を表する。

今回のゼミで最も驚いたことは、大校長と思われる先生方が、弃当の世話、寝具の心配、会計担当など、いわゆる大会の裏方を担当していること(中略)

さすがに先生方は、ひとりひとり風情が

あり、その格調高いお話、ユーモアたっぷりのリードぶりはゼミの雰囲気をついにへんしつとりとしたものに引き締めてくれたように思い心から感謝します。大会の裏方役は、一般に最も実践をし作品をもち、発言をうんとして欲しい中堅層が担当するようですがそのためにせっつかくの活し合いが低調になりがちです。そういう点今回のゼミにおける校長(先輩)の先生方の活躍と配慮に対して心から敬意を表したいと思えます。(他の)先生方もそういう気持をくみとって必ずや今以上に情熱をもやして実践にはげみ連盟を貫の高いものにしていくものと思えます。)

読んでお判りのように、ゼミナール形式でもたれた第21回札幌大会に青森からお招きした講師のひとりである柿崎先生の大会印象記である。さすがが研究実践者だけに、私共仲間のある様を適確に捉えている。たしかにこのような先輩の暖かぬかしい指導が連続と続きそれに応えるべく中堅・若手が燃え続けてきたといえよう。

この文にある先輩方も多くは退職された。こまめにゼミナールの裏方で走り回っておられた斎藤一雄先生が惜しまれて逝かれたが、

和田、砂金、橋本、中川、太田各先生方は、益々お元気で、外遊されたり、創作への一層のご精進を続けておられる由、誠にご同慶に堪えない。(この十年以前の先生方については別のコーナーでふれられるようここで省略させていただきます)

ところで、この十年の初期、伊東、高橋先生の時代は、連盟としても組織や財政の面で色々な問題を抱えていた頃である。これについては別のスペースで紹介されよう。そのような時代の危機感がそうさせたか、研究面への傾注、打ち込みの意気はすさまじく、文字通りの手弁当で、侃侃諤諤の討議が夜を徹してもたれたこと始終であった。

この度の外遊で少々おやせになられて帰られた伊東委員長はこの頃はまだ結構太っておられて、その温順、やさしい口調の中から、本質のとらまえ方についての厳しい示唆は、我々研究の浅さにまさに愕然とすることしばしばであった。

ちなみに十年前の研究會という第19回大会であろうが、その頃常任委員はどんな発表をしていたか調べてみるのも興味深いところである。(この頃はまだ和田委員長時代)

オリエンテーションでは、なつかしい荒木女史を筆頭に、辻、森川、種市、遠藤、佐藤、佐藤吉、金井、吉田広、中村矢が華々しい顔をならべている。発表者は、

- 幼 絵 芝木 捷子 海の絵をかく
- 小一 絵 高畑 睦子 ふしぎな木
- 小一 工 伊藤 恵 かみのいえ
- 小二 絵 遠藤 久男 おうまにのつたおうさま
- 小二 工 長津 喜代 水ぞくかん
- 小三 絵 側瀬宇太郎 友だちをかこう
- 小三 工 嶋山 恵子 ぼくのつくったお話
- 小三 彫 成田 一男 何かしている動物
- 小三 工 森川 昭夫 さかをおりる動物
- 小四 絵 金井 秀男 ちいさなおうち
- 小四 版 松島 輝男 学校のこと
- 小四 絵 佐藤 圭 わたしたちのくらしから
- 小五 工 佐々木理温 夢の家族写真
- 小五 彫 伊藤 英世 友だち
- 小六 工 佐藤吉五郎 小さいベットの家の家



- 小六 絵 坂口 清一 楽器をもつ友だち
- 中一 絵 奥野 郁男 花の表現
- 中一 彫 多田 絃一 顔のある壺
- 中二 彫 石岡 博昭 新しい塊りの表現
- 中二 工 加藤五十和 いれもののデザイン
- 中三 工 菅原 棧三 童話の表現
- 高一 工 中村 矢二 無彩色による平面構成
- 高二 工 土岐 積次 レンダリング

として活躍しているところに本部の力強さを感ずる反面若手の育成を考えるべきであろう。続いてバトンは引継がれ、高橋、辻コンビの時代に入るが、これはもうなんといっても第30回全国大会札幌大会を頂点とする、充実発展まさに極まった時といえよう。

前期の研究の積み重ねという上環もあつたが、両巨頭の剛・柔。ときには柔剛入れ代つての、厳しい反面、人情味溢れる指導、運営で、組織の確立はもとより、財政的安定、研究の深化、事業の拡大など大会を支える機動力、実践力が総合的に発揮された時期であったといえよう。

全国大会に至る経緯や、成果については別にふれているので省くが、組織面では、先輩の方々には渉外という形で冒頭の引用文にあげられた精神で固め、会計種市、研究金井、事業松島、広報吉田等をチームに、責任分担など明確にされた時期でもある、特に新しい事業として、教育美術展、美術教室、立体造形展等の基礎づくりに、運営の安定化に全委員総力をあげて取り組んだ苦しくも楽しい充実感の溢れる時期であった。常任委員も一氣に増員され、強力な体勢となった。若手の実践家が多数仲間に入り、本部の将来設計の面

大いなる希望をもてるようになった。  
全国大会を終えてホントする間もなく本部は、連盟30周年を迎えるための活動へと動き始めた。辻、森川コンビの時代の始まりである。

組織面での若返りと充実を図る改革が積極的に進められた。

副委員長に出た種市誠次郎の後の会計の重責には、ベテランの遠藤久男が当り、温厚な森川事務局長の下に、松島輝男、斎藤洪人、中村矢一がこれを補す事務局の中核とした。研究の充実、一貫化ということから、研究部員も、幼児部、小学部、中学部それぞれに全員が所属し、永かった金井研究部長の後を若手のホープ船着昭弘がこれを継ぎ、長津喜代、荒谷博文、芝木マサ、土岐楨次がそれぞれ立場からこれを補佐するということで次長としてついた。

指導の構築以来十年を経て、研究内容の一層の発展をまとめるべく、研究部を中心に、更に若干のメンバーを加えて、研究誌企画委員会を組織し、鋭意この作業に連日の会合をもつて当っている。全道美術教育の一つの指針としての発表が期待されることである。定着してきた事業面には、松島に代わり、

経営手腕を買われ、佐藤吉五郎がこれを取りまとめ、鈴木将夫、佐野千尋と、教育美術展を展覧館が、美術教室を白井園毅が、立体造形展を山本金次郎がそれぞれ所を得て企画推進に力を発揮している。実際の業務運用に当っては委員全員が努めるというのも、独自のシステムとして誇ってよいことであろう。

庶務には、ベテラン吉田広仕が部長となり後藤誠功、蛸子信也、山田紀等実務派が固めている。

連盟30周年記念誌作成という大役は、博覧強記、今や連盟の生き字引的存在である金井秀男を中心とする広報部の仕事となる。

次長に、谷勲、伊藤英世、森健、平山満、香西富士夫等をあげ、さらに、編集特別委員として若下の強力メンバーを補充し、編集に日夜努めているところである。

札幌支部担当は、強固な組織づくりや、独自の研修の成果をあげた坂口清一の後を、札幌研工部長となった船着昭弘が継ぎ、岩間歳仁、伊藤暢紀など若手が一層の支部団結に力を注いでいる。

以上雑ばくであるが十年の駆歩る記である。

# 渡島地区



渡島美術教育研究会

近堂 俊行

(大野町萩野小)

図工、美術科と言えば、他管内でも多かれ少かれそうであるよう、渡島でもいわゆる主要教科？に対し、マイナー教科と考えられがちであり、小学校の教師からは苦手な教材の筆頭にあげられている。

当研究会の組織も、したがって、国語、算数数学などの大世帯に比べ、管内二千余の教師の五パーセントにもみえない、六、七十名を組織するに過ぎない小サークルである。

しかし、教育の現代的な課題、創造性の開

見ることができ、喜ばしい限りである。

しかし、これまでの歩みは平坦なものではなかった。当然ながら、経費の問題。はじめは会員のポケットマネーにも相当の負担がかかった。さらには、作品の運搬、搬入搬出。地教委や関係団体への働きかけなど。しかしこれらの活動団体が、美術教育の振興に役立っていたとも言える。

(渡島教育研究会、美術部会)

渡島では、サークル連絡協議会が主催し、合同研究会集をもっている。

この研究会集の美術部会へ最近は大盛況である。客さんが数名現れる。昼食時には大盛況である。これらの先生方は、いずれも他サークル員で自分の部会からちよつとひまを盗んで覗きにくる人がたである。

美術部会は参加者は作品を持ちよることを原則とし、実践を深めている。

壁をおおう作品群、みているだけで楽しくなる数々の立体。他のサークルの先生方にとつても魅力のある部会となっているし、わたしたちも、それを願っている。

美術教師のほとんどは専門的な教育を受けているし、それなりの実践も積んでいる。この力を今わたしたちは、校内に、町村にどの

ような形で還流するかが大きな課題である。「自分のカラにとじこもるな」をわたしたちは合言葉にしている。

このような運動が今徐々に表われてきている。全校写生会の取組み、造形フェスティバルの実践や町村での図工美術講習会等のレポートが出されてきているなどはその表れであろう。(いくつかの講習会のなかから)

美術教師としてサークルとして管内の水準を高めるため、また自らの研修のためこれまで、数回の講習会を開催してきた。このなか特に思い出深いものについて記したい。

教育大学函館分校を退官され、信楽で修業されていた淵上先生をお招きして行われたやきもの講習会。夏休み中のおつきなな三日間にわたり、素焼きから本焼きまでの実習、上半身はだかになり、かまをのぞいたサークル員の先生方。初めての焼きものに歓声を上げた参加者。淵上先生の格調高い講義とともに、忘れられない講習会のひとつである。

函館美術教育研究会とタイアップして行った「粘土でつくる講習会」では、函館・渡島から百名をこす一般の先生方の参加があり、終了後、女の先生と年輩の先生から、本当に楽しかった、嫌いな図工、にが手の図工と

発。新指導要領改訂の基本方針にもうたわれている、人間性豊かな児童生徒の育成、を担う最も重要、かつ中核的教科としての自負をもち、少ないながらも、実践研究に、還流活動に、精力的な活動を進めてきている。  
北海道造形連盟結成30周年記念誌発行にあたり、当研究会十年の歩みからその上なものをあげてみたい。

(十一回を数える管内児童生徒美術展)

昨年の出品者目録をみれば、管内16町村一三二校あるうち実に八十二校の児童生徒の作品をみる事ができる。これは児童数名の複式校から千名を超す大規模校にいたるまで62パーセントの出品率となる。

わたしたちは、いわゆる作品のよしあしを競う展覧会ではなく管内の美術教育の底辺を広げる運動を美術展を通して進めてきた。したがって出品作品は、図工、美術の時間数時間で仕上げた作品も、課外に20時間以上もかけたきめの細かい作品も展示される。このことから審査をせず全員入選の立場をとってきた。これらの運動が出品率に表れてきていると思う。また一方、この中から、道や中央の美術展で、最高賞や多くの入賞者を出したことは、底辺拡大とともに美術教育の水準の高まりを



思い込んでいたが、図工科を見る目が変わった”という便りをいただき、めんくらうと同時になんともいわれぬすがすがしさを感じたものである。

通信費にしろ、講師招へいにしろ、管内的な講習会を開くとなると大変な仕事である。しかし、こういった場面に出合う時、サークルの役割をしみじみ感じるものである。

—喫茶店での小品展からデパートでの美術展

—管内教職員展

函館・道南は昔から文化の香りの高いところ

ろ、喫茶店やギャラリーでは常に個展やグループ展が行われている。

その中で一風変わっているのが渡島管内教職員美術展、この二年会場の問題で休んだが14回目を迎える。全道展での最高賞受賞者、中央展の会員といった先生方から、生徒といっしょに制作した作品、教材研究の試作といった、実にバライティに富んだ作品群。

父母や児童生徒にとつて興味のある美術展でもある。

この作品展、初めは喫茶店を借りての小品展であったが。会員が出品料をはずみ、目録に広告をのせてもらい、その余剰金で、児童美術展を催す。といった苦肉の策から生れたものである。

よき組合はよき教師ということばがある。

わたしたちは、よき画家は、よき美術教師を合言葉にしている。自分の作品をきびしくみつめる目で、児童を生徒をみつめ、実践を深めるとともに、組織的にも管内美術教育充実のためにも、活発に活動していきたいと願っている。

道造形連盟のますますの発展を祈るとともにこれからのリーダーシップをお願いしたい。

一五七

〇四七・九・三

管内国上美術研究会を北松山小学校を会場として行う。

— 授業者 細川教諭

講師 堀合 隆 デザイン指導について

〇四七・一一・六―一〇

第三回展を北松山町青少年センターで開催この年より幼稚園児の作品も展示することとしたため出品数二五五、以後毎年二〇〇点を越える出品となる。

〇四七・一一・一七

— 授業者 熊石町で開催

講師は道教育大学助教授で日展出品作家の折原久左衛門氏

〇四八・三・九―一

第四回展を乙部町で行う。

〇四九・七・二九―三〇

全道造形教育研究会(美観大会)に中川真一郎会員(江差小)提言者として発表。

〇四九・一〇・五

— 授業者 熊石町で行う。

講師は熊石高等学校平賀徳行先生による七

〇四九・一一・一七―一九

# 松山地区



三浦 敏勝

(上の国湯ノ代育中)

〇四三・二・二

松山管内美術教育の高揚と担当教師の研修を深めるため、研究会設立の必要性の筑造台頭する。

〇四四・二・二〇

設立総会を熊石町福祉センターで行う。

●発起人

堀合 隆、中川真一郎、三浦敏勝

●会長 津村彰広 ●副会長 本根恭彦

●事務局長 三浦敏勝

〇四四・七・一一

第二回総会を熊石町福祉センターで行う。

業務として、①研究会 ②講習会 ③児童

生徒の美術展 ④会報の発行等を決める。

また美術教育研究団体との研究交流を図る

ことから北海道造形教育連盟に加入するとともに、渡島美術研究会との連携を図ることとする。以後毎年一、二回発行。

〇四五・一〇・二七―三二

第一回管内児童生徒美術展を今金町公民館において開催、出品数一一、団体賞および個人賞を設ける。

〇四六・二

— 造形研だより一第一号発行。管内全校に送付。以後毎年一、二回発行。

〇四六・二・二七

— 立体版画講習会を北松山町公民館で開催

講師 津村会長 参加者二〇名

〇四六・七・一〇

管内国上美術研究会を乙部小学校で行う。

— 授業者 中川・佐藤両教諭

講師 金井秀男氏(造形連盟研究部)

〇四六・九・四

— 工芸講習会を北松山町で行う。発池スチロール(小学校向け)七宗(中学校向け)の二

内容

〇四六・一一・五―七

第二回管内児童生徒美術展を江差町文化センターで開催。今後は方面ごと移動展を行うこととし乙部・北松山の両町で展示。出品数



第五回展を上ノ国町社会福祉センターで開催。

〇五〇・六・一一

総会において会長ほか役員の改選と規約の一部改正をおこなう。

●会長 八幡 肇(員取洞小・長)

●副会長 西海谷鶴治(八束中・頭)

●事務局長 三浦敏勝(二俣中・頭) 留任

前会長 津村彰広(江差中・長) 青木勝蔵

(乙部町教育町)の両氏を顧問とする。

○五〇・一〇・一六

管内図工美術研究会を江差小学校で開く。

授業者 中川教諭

講師 折原久左衛門氏(教育大函館)

○五〇・一一・二二～二三

第六回展を瀬棚町スポーツセンター特設会場で行う。

○五一・九・二七

管内図工美術研究会を今金小学校を会場として町内小中学校合同の形で開催。

授業者 中村 孝(今金小 小一)

中沢純一(花石小 小五・六)

吉川芳江(今金中 中一)

講師 中川 諭(七版中教諭創元会員)

「未来に生きる創造的な人間を育成するための図工美術教育」

○五一・一一・六七八

第七回展を乙部町コミュニティセンターで開催。出品数小学校三〇五、中学校一三六に達する。

管内教職員美術展も併せて行う。

○五一・七・二八

第三〇回全国道形教育研究大会が札幌市で開催され中川会員小学校低学年「絵画」領域で提言発表をする。

○五二・一一・九

管内図工研究会を江差小学校でおこなう。

授業者 野呂憲一教諭(江差小)

研究発表 山寺壽恵子教諭(中里小)

「地域に根ざしたポスターの指導」

○五三・七・二八～二九

第二八回全道道形教育研究会函館大会を共催。提言 小デザイン 堀合 隆(上ノ国小)

小工作 中川真一郎(江差小)

司会 中デザイン 三浦敬勝(湯ノ岱中)

○五三・一一・六

椋山管内教科等研究会開催

図工美術部会提言者

小デザイン 田中俊一(瀬棚小)

堀合 隆(上ノ国小)

司会者 西海谷鶴治(菜浜中)

○五三・一二・七～一二

第八回展を江差町江光デパートにおいて開催する。出品数二四一。

○五四・七・二八～二九

第二九回全道道形教育研究会(旭川大会)に参加。幼稚園部会司会者 池田順子(江差幼稚園)

○五四・九・二六

管内図工美術講習会を上ノ国町福祉センター

で開催。講師は堀合(関内小)中川(江差小)の両会員

〔現況と今後のあり方〕

本会も設立後十年となり、会員数三十名と研究団体としては小じんまりとしてはいるがその運営・活動もほぼ定着化したといえる。

しかし会員数の伸び悩み、活動会員の特定化、予算と事業の関係等問題も少くない。

今後これらをどのように克服し、どのような形で会を発展させていくかが大きな課題といえる。

会員相互の連帯感を見つめなおし、椋山の未来にわたる美術教育のゆるぎない創造を目ざし、自らの絶えざる研修によって、アイデア・センス・テクニックを身につけることが会の高まり、椋山の美術の高まりとなることを銘記し今後に期待する。

連盟の本会に対する十年に亘るご支援に感謝するとともに限りない前進をお祈りする。

# 胆振地区

――伊達の子どもの作品を語る――



笠原 金一

(胆振、伊達西小)

一九七七年八月、突然の有珠山噴火で、あわただしい中に、不安な生活を、子どもたちも、先生方も続けてきた。

あれから3年たち、若干の後遺症をのこし悪雲が立ちさり、胆振西部の街々にも活気がみちてきた。

胆振西部は、体力づくり都市宣言をした。伊達市、文化活動に町ぐるみの成果を上げていく、蛇田町がありますが、その他の町々は交通の便も悪く、何かにつけて胆振西部地区として一斉に活動することは非常に困難なことである。

しかし、少しでも、胆振西部の子どもたちのため、教師自身の研修の場としての第一歩

が、伊達市小学校教育研究会図工部が、子どもたちの作品について語ることからスタートした。

互いに、作品を持ち寄り、会場も、輪番制で、毎月実施しています。

ここで伊達市を中心とした胆振西部の道形活動に熱意のある人々を紹介してみます。

五十四年度、伊小研図工部会に、室蘭市造形部で、研究に情熱を注いだ、田口香苗先生が、伊達市稀府小学校に転任されメンバーが一層強化された。

部長として、元伊達西小で、子ども道展など実績を挙げて、一時室蘭市造形部で活躍した伊達東小学校の片平浩史先生。

伊達市長和小学校から壮瞥町壮瞥小学校で子ども達の絵の研究に、取りくみ伊達市有珠小学校にもどられた、草野達男先生。

蛇田町の美術教育の基礎づくりに努力し、室蘭転出後また伊達市関内小学校にもどられた、石塚克己先生。

伊達西小学校で、美術教育に新風を吹きこみ登別市で活躍の、野崎信夫先生。

伊達市達南中学校の美術教育と、伊達市文化活動の基礎づくりに努力され、現在苫小牧で活躍の、佐藤敦子先生。

伊達市長和小学校で、子ども達の描画の指導に取り組んで、現在、蛇田町洞爺温泉小学校で活躍の、斎藤正宏先生。

伊達市の美術教育、文化活動の中心として活躍し伊達中学校の美術教育に力を入れ、昨年の移動で、壮瞥町立香小学校で避地の教育にとりくまれておられる渡辺恒治先生等、ここに紹介した人々は、伊達市を中心とした一部の道形活動家にはすぎません。まだまだ胆振西部には、道形教育に熱意を持って貢献した方々が多くいらっしゃいます。

伊達市の図工部の最近の活動は図工部のメンバーが、学校課題の主題によって他教科に移動して、固定できないのが、現在の悩みであるが、昨年度までは、作品を通しての話合いが主な活動であった。本年度は、新指導要領改訂に伴う問題や、伊達市の図工カリキュラム編成への研究が各校で実践課題となっている。

研究成果の発表等、少数精鋭のメンバーで精力的に取り組んでいる。

ここで、活動の一部を紹介してみる。

① 伊達市の図工部会は、各学校の事情によつて年5回程度しか部会を開催することができないが、会場は、特定の学校にかたよ

# 日高地区

—日高の美術教育の動向—



越後 光雄  
(静内高静小)

○はじめに

季節を問わずどこから望めてもその姿は、女上様のごとく青空へスッキリの日高山脈、その真下の広々とした牧場を駆けまわる貴婦人のような軽種馬、さらに淡い色の太平洋の波、なんと美しい自然であろうか。私たちはこの美しい自然の中で生活しているのであるが、現実の生活はそのような美しきところではない。過疎に悩む地域、さらに無気力無関心無感動の子ども、マイホームのため鍵っ子になり林しさから非行へ走る子ども等、現代社会の問題がある。

教育は新しい価値を求めて前進しなければならぬと云うことは事実であるが、新しい価値はいつも流行品のように表われては消

えているが、こんな流れの中に全道造形教育連盟は現場の実践の上に立ってある時は派手やかになる時は地味に教育の価値を求め今日へ進んで来たことは、私たちのふれ合いの中でよく認識し高く評価するものである。

その理由の一つとして私は日高で生活し日高的課題を解決するための現場実践の基盤になっている筋道は造形教育連盟である。

しかし、当日高のもつ問題は、共同研究は深まっていく反面、地域が広く、集まって討議を重ねることが困難なことであることと過疎によって図工美術担当教員が年々減ってきているということである。

しかしその中で、我々の情熱を支えるのは毎年の研究大会へ発表者として役員(司会)として参加したことである。それがまた現場で本当に生きたものになった。

ここに主な大会での活動をあげてみると、  
1) 江別大麻大会では  
この年絵画分科会の司会者へ一名選出、今でも感動していることは児童の作品を数多くもって他地区の作品の討議に参加したことである。

2) 岩見沢大会では  
絵画分科会発表「どうしたら子どもたちが

ームに展覧した。子どもたちは休み時間毎に輝きの目で自分の作品を鑑賞していた。

②あそび76年

遊びの中に自分たちで作ったもので遊ぶ、ロボットで、円ばん遊び、タコ上げ。造形活動は生き生きとした子どもの活動がみられて来た。

③パレード77年

自分たちで作った作品(おみこし。まとい。ししまい。りゅう)で町をパレードした。ポスターをつくる人。父母へ案内状を書く人。放送で作品の説明をする人。

これらの活動実践が写真説明であったことから、反響を与えるものとはならなかった。  
(4) 旭川大会での発表

「どうしたら子どもたちが生き生きとして造形活動にとりくむか」小学校B絵画には全校のみどりの風景の作品を持っていた。

①どの窓口から対象物を見つめさせるか

②観察の深まりでは主観的観察から客観的観察、又画面構成のくふうでは無意の構成から計画的な構成へ。空間のとらえ方では平面的な表現から空間的な表現へといった意図の作品を用意した。

③「みどりの風景を描く」中学年以上はそれ

い好みの育成

以上の基本目標からの反省をまとめると、  
●こまぎれの題材を子どもへあたえては目標達成が困難であること●学年がばらばらなとり組みではいろいろな問題が発生しやすいこと●こまぎれの時間では題材の目的が達成できないことであった。

そこで日高は  
①大単元方式をとり入れた。

○学級旗(デザイン) ○友だち(絵画)  
○みどりの風景 ○ねんどで ○造形フェスティバル ○お話し絵 ○遊び(デザイン工作) 年間7~10題材

②総合学習方式をとったこと。

③作品を各学年毎に持っていったが多くの批判も受けたが、初年目としてやむをえなかった。

(3) 札幌大会(全国大会) 発表

「造形フェスティバル二ヶ年の実践」  
みんなでつくろう高静の文化を合言葉に3年間実施してきた。本年度は総合学習内容を充実して実施する

①かざろう75年

全校児童一六〇〇名が、かざるそのことを目的にした全員の立体工作作品をブレイル



生き生きとして造形活動にとりくむか」

わたしたちはこのために目標から検討をくわえた。

①生活するために必要なものを創造する主体性の育成

②ねばり強くじっくり考える持続的な意欲の育成

③自己にきびしく衝動的でない精神のかまえるを持った情操の育成

④よいものをよいとす力を育てるための強

それ校庭の自分の好きな場面を選び8時間から12時の時間で製作したものであった。その中で低学年の作品は高く評価された。

会員数10名程度ではあるが日高支部として今後も長期にわたって活動を進めてゆきたいとして、一人でも多くの仲間たちへ造形教育連盟の味を認識させたいことを希っての活動が、この10年間であった。

### 室蘭地区



石塚 潔  
(室蘭東室蘭小)

北海道造形教育連盟が戦後新しい出発をしてから、本道の美術教育がめざましく発展してきたことは、時代の流れとは言え、この美術教育の道ひと筋に歩いてきた人たちが誰でも納得しているところである。造形連盟の歴史そのものが、本道の美術教育の歴史そのものだと言つてよいだろう。その歴史の中に

も教育思潮の変遷や、社会の要求等によるいろいろな節があった。連盟は、その節ごとに力強い理論と実践が構築され、節ごとに飛躍してきたが、その根底に人間尊重というささえがあったからではないだろうか。室蘭における美術教育も、この連盟の節に刺激され、多くの示唆をうけながら育実な研究実践を積みあげてきたように思う。室蘭での造形連盟の全道大会は、今日までに3回開催したのであったが、これらの大会は室蘭の美術教育の発展のためには、測り知れない力になったし、飛躍台となる大きな節になったように思っている。

※ ※ ※

この10年の中で、室蘭造形部の果たした役割は、48年の第23回造形大会開催に凝結している。41年の16回大会までの2回の大会は、石崎義政氏(現市立港北幼稚園長)諏訪英雄氏(現北辰中学校長)をはじめとする先輩諸氏の卓越した指導性と、美術教育にたずさわるものの人間的な魅力によって、研究が推進された大会の運営がなされて来たものだった。48年の第23回大会は、この両先輩の助言を受けながら、文字通り若手の力を結集し、ひとりひとりの実践をだいにし、そしてその実践

を軸にして、室蘭の生の姿を提示しようとする研究を進めた大会であった。丁度、連盟の指導の構築。論が全道的にも定着を見せた時でもあって、大会開催決定までの経過はともかくとして、みじかい準備期間の中の連日の部会や打合せなどがとても楽しく、部全体が生き生きしていたし、充実した毎日であった。

※ ※ ※

第16回大会が室蘭で行われてからの室蘭造形部の研究は、いわゆる授業研究という形の中で授業実践に取り組む方向に進んで行ったが、48年の第23回大会は、そうした研究の流れと実践の集積が、指導の構築の助けを借り、室蘭なりの解釈を含めながら、一人ひとりの子どもの表現力をどう高めるか、といったサブテーマの中に位置づけられて行った。このサブテーマ設定に当って、当時の研究部長青野昌勝氏(現胆振教育局指導主事)の提言は、

「未来の造形教育は、その位置づくりである。う延長線を逆にたどっていくと、結局は毎日の教室での実践こそ、その未来を規定する重要な鍵であり、それを支えるには、基調を更に一歩ふみこんだ、より具体的な研究を推進するための新たな今ひとつのテーマを設定し



なければならぬ。」

として、室蘭の研究の視点乃至は姿勢を明確に打ち出した。その後、今日までの室蘭の研究の推移は、この視点が基調となつて進められてきたわけだが、この10年間の歩みの中では、教育思潮の推移に伴い、また室蘭市教育研究会における各教科共通テーマに沿った主題規定はあつたにしても、この基調を生かしながら、各領域の実践研究を今日まで続けてきたところである。

描画領域では、石丸雅彦氏、武田貢氏、佐久間恭子氏、中坪市郎氏、赤司賢二氏等が中

心となつて研究が進められてきたし、版画では高城敬二氏、佐伯進氏(現造形部長)松野満朗氏。彫塑では、高橋昭五郎氏が中核となり、デザイン工作領域では、志賀健一氏、中村民夫氏、小笠原伊三夫氏が中心となった。これらの領域別実践研究は、2年サイクルで行われ、理論研究と実証研究に分けたり、ある時は統合したりしながら模索を繰り返して来たが、今年度は、工作領域の2年次の実践のまとめの年であり、10月の授業研究会には、野崎勝男氏の実践をはじめ、各校の実践報告がたくさん持ちよられ、これをもとにした討議も活発に行われ、伊藤忠先生の助言と共に、実りの多いものであった。

※ ※ ※

室蘭市教育研究会の中にあつて、造形部はたいへんユニークな存在として位置づけられている。それは、部員相互がそれぞれの実践の仕事認め合い、それぞれの人間性を尊重し合うところにあると考えている。そして、イデオロギーや思想を超えて、人間同志の結びつきをだいにしようとするところにあると考えている。これは先輩が築いた造形部の伝統でもある。

この10年の歩みの中で、勇退された先輩、

### 苫小牧地区



片桐 勉  
(苫小牧・光洋中)

転動しこの地を去つた同志、病から再起を図ろうと懸命に生きていた同志もいた。しかしこの10年の間には、若い力も確実に育つてきている。現在の室蘭造形部は、こうした新鮮な人々に支えられていると言つてもよいだろう。研究もひと区切りした現在、これからの課題を模索し、再び歩きはじめの段階を迎えた。ゆとりと充実をめざし、人間性ゆたかな子どもを育てる。ために、造形教育の果すべき役割は何か、どうとらえて実践していくかを教育の原点を見つめ直しながら、一歩一歩進んでいきたいと考えている。

今から12年前の苫小牧大会は、連盟の研究主題である「指導の構築を具体化する」の3年目のまとめの年で意義ある大会であった。そして55年は30回大会ということでこれまで誠に意義のある研究会で北海道造形教育にとつてもひとつの「節」となるべきものと思ふ。

いみじくも「学習指導要領」の改訂が55年度から小学校で中学校が56年度というこれまで苫小牧大会にとって因縁の深さにつづく感ずるものである。

それでは、43年の第18回大会の取り組みから30回大会に至る途を簡単に述べてみたいと思ふ。

当時の研究主題は「指導の構築を具体化する」一教材の新しいとらえ方であった。

30数人の限られた造形部会員が41年の室蘭大会・42年の函館大会での「指導の構築」を苫小牧では、どう具体化し、どうまとめるのかを三月の春休みに郊外のウトナイホテルの合宿研では夜を徹して議論し合いお互いがそれなりに納得し七月の大会のスタートとしたのであった。この時の資料は連盟が六年がかりでまとめた「指導の構築」の第一集（造形能力体系表と系統表：）や特に苫小牧がサブ

テーマとした「教材の新しいとらえ方」を明確にし公開授業・提言に共通のねらいを出すべく広岡亮蔵氏の「教材構想入門」をテキストに遠藤未満副会長（元美園小学校長）や全道的にもユニークな仕事で知られている一年前追分小から苫小牧入りした池本事務局局長を中心とし広間の移動黒板を前に造形部員が入れかわりたちかわり黒板が真白になるばかりか青霞が白いジュエータンでも敷いたように正に「角泡をどばし、教材部とは、基本要素とは中心概念とは……それならこのカリキュラムは、こまぎれ的で指導の構築は全くできてない……夜になると各役員に分科会が出来上り本当にとことん納得する迄話し合ったので、その後の研修会でもちくはく考えもなく大会に向って熱っぽく進むことが出来たものと思う。更に又、この大会が期待以上の成果があったことは、大友研究部長（現在富川小学校長）を中心にした幼・小・中のスタッフの取り組みにあったと思うのだが、ある時は西小学校で、ある時は沼の端中で、そしておまけに大友先生の自宅迄押しかけ、授業の組み立てはよいか、この授業は四月から七月迄の流れの中で、何をねらいとして構築しているのか、又提言の意図するものは授業とのずれ

はないか等……チエックし合い深め合ったものである。幼稚部会では、先生方が絵の勉強をしなければ池本事務局局長を先生にし熱心に学び教材構成のための教師側のかまえた前向きな姿が見られた。札幌と近いこともあって連盟との連携を密にし数回の研究交流をもつたと記憶している。研究主題やサブテーマについての全体研修をもち苫小牧で意図していることでのよいかの確認や事務局が札幌に向いての打ち合わせ等……今考えてみるとかなり念を入れた準備期間であったと思うのだが実際の大会迄の日程は五ヶ月という短かさであって、いうならばヘリポートの作業で一気に大会に向けて会員は燃焼したということになる。大会を無事に終えた後の会員の胸中は安堵感と研究に対する自信に満ちみちていたのは確かである。

第30回大会の取り組み

18回以降の苫小牧は、池本さんを中心とし嵐づくり・ダンボールプレー・熱気球等の実技研究に少年のように胸おどらせたり、子ども達の作品について語ったり、授業交流等の研究は会員の手で継続されており、18回大会の火は消えないで燃え続けているのである。現在の造形部員は73名で自ら参加の幼稚



園を加えると百名近い規模になった。「ひろがり」と深まりのある造形教育を求めてのテーマについては四年ほど前から、実践家の池本さんを中心に、造形フェステバル発泡スチロールの嶺でウトナイ湖探険等の誠に子ども達がダイナミックにぶつかつていく所謂「ひろがり」を求め、そしてこれを支えるところの、子ども達が造形活動をしていくための確かな能力を育てる所謂「深まり」を基盤とした実践研究が若草小を中心にして広がっているので55年の大会までは、金子研究部長とそのスタッフによりテーマの理論的な

裏づけが明確になるはずである。テーマと授業・分科会提言については予定している合宿研での研究討議は前回に増して激しいものが期待される。公開授業も各領域を網羅することなく、テーマにそって、造形あそび（低学年）授業の演出（たてわり）ひろがり（低学年）授業（中・高学年）の構成とする考えで例えは七夕フェステバルでは中学年の手伝いを高学年が技術提携をするなどが考えられるし、中学校では一年から三年迄工芸の授業をし各学年のねらいをふまえた組み立てを考えている。新指導要領では小・中学校の図工美術のねらいとするところは「つくることの楽しさを知り、豊かな心を育てる」ことであり特に低学年では総合的な造形活動をねらいとしていることから推測できるように私共の研究の方向には誤りはなかったと思うのだが私共は研究会の公開授業は教室の中で、友だちの写生や風景写生をする段階からそろそろ脱出しなければならぬと思っている。そんな事から分科会も公開授業等の集約を考えているのだが、確かに新しい研究会の形式に取り組むことは勇気のあることであるが多くの参会者の先生方と共に今後の造形教育の方向を求めて行きたいと念じているしだいである

札幌地区



坂口 清一

（札幌・東山小）

北海道造形教育連盟札幌支部10年のあゆみが与えられた主題であるが、札幌支部誕生にまで溯らなければ、曲節の足跡を顧みることが出来ないと思ふ、連盟20年記念誌をも開い



てみたが記録に無く、空白の足跡を探るにはかなりの労を必要としたのである。

ちょうど第4回立体造形展の審査が東山小學校であり(54・10・21)辻連盟委員長・森川事務局長・松島事務局長・遠藤会計部長・金井広報部長・船着研究部長・など集まる審査本部室で、審査事務の合い間の短時間をさいて空白の足跡を語っていただき、それをもとに総合的に記録することにしたのである。

札帳支部の誕生は、昭和31年であり、和田芳郎先生が札教研工部長を務め、支部長の役を41年春までの10年間に及びその重責を果されている。

当時の活動は明らかではないが、現在の連盟を育てた多くの先輩顧問が名を連ねたことであろう。伊東将夫先生・高橋栄吉先生共に元連盟委員長が40才前後の最も充実した時代で、支部研究推進の母体となったであろうことを思うのである。

更に、辻連盟委員長を始めとする委員の重責を担う諸氏も支部員としてその研究実践の中核となり、すさまじいばかりの実践発表と理論のぶっつけ合ひであったことを聞くのである。

札教研工部の総会(大通小の図書館)に出席して、当時の支部活動を容易に想像出来るのである。すなわち、佐藤 圭・佐々木理温・金井秀男・側瀬宇太郎などの研究主題追求や研究発表を見聞し、研究の深さと推進の大きき、そして人間的ふれ合いの中で、自己中心的であるときえ思われる一面をのぞかせながらも、自由な発言の場を設けられていたことを今も思い浮べるのである。

和田芳郎支部長の頃は、胎動の時代であったとも云えるだろう。多くの指導者が、多くの連盟の財産を築き上げ、支部のゆるぎない土台を構えたことと思うのである。

第2代辻 悦平支部長は、昭和41年春から45年春までの4年間を歴任し、多くの若手実践家を育て上げたのである。当時、新設校澄川小時代で、学校ぐるみの研究実践(特に物語の絵)と指導法は、今も全市に高く評価されているのである。実践により生まれた理論・経験による理論が辻先生の人柄となり、多くの若手支部員を敬服させ、自分の財産を分かち与え、より多くの仲間を育てたのである。辻支部長の時より、五百円の会費を納入し支部員としての自覚と、確かな実践の構築をはかった「改革の時代」とも云えるだろう。

「近年私達が直接ご指導を戴いた先輩が次々と現職を去られ、なんとなく寂しさを感じますが、それと同時に私達は、もつともつと頑張らなくてはと感じます。造形教育のあり方をもう一度見つめなおし、仲間の輪を大きく広げて、がっちり取りくんでみようではありませんか。」と辻部長の挨拶からも、当時の方向づけがなされたことを改めて知るのである。

第3代遠藤久男支部長は、昭和45年春から支部副委員長松島輝男先生・事務局局長側瀬宇太郎先生らと共に、51年春まで6年間活動をする。

支部活動始動の時代である。この頃から会費下円を納入することになり、その中五百円は、連盟本部に納入することになった。

活版印刷による札帳支部「造短」第1号が発行されたのは、昭和49年1月20日で、サクラクレパス株式会社のご支援により発行することが出来るようになった。

それまでは、手刷りによる造形短信や支部加入者名簿など5号まで努力されている。支部加入と活動への積極的参加を呼びかけたが会費納入が進まず、事業推進・運営に大変苦勞を重ねたこともしのばれる。

「造短」第1号に、遠藤久男支部長は、「札幌の造形教育を総点検する立場からも、支部の例会には多数の参加を希望する。従来例会は必ずしも盛会とはいえない。公私多忙であることは、誰も同じ立場であると考え、参加への積極的な姿勢を示していただきたいと願っています。」と

支部委員構成

支部長 側瀬宇太郎(羊丘小)

事務局長 船着 昭弘(西野第二小)

支部事務取扱

委員 白井 國毅(豊水小)

支部短信編集企画情報交流  
谷 勲(真駒内緑小)

支部短信編集企画情報交流

高杉 正和(新川中央小)

支部例会企画推進

村谷 利一(札南中)

支部会計

山崎 裕子(幌西小)

支部庶務

いずれも元氣溢れるフレッシュユマンで、会員の造形財産を豊かにする活動が試みられ、第30回全国造形教育研究大会を1年後にひかえ、新鮮な企画と強力な推進がなされたのである。

「造短」の内容もP4からP6へと紙面を増



し、30回大会への期待感・使命感を盛り上げ大いにPRし、見事に成功したといえる。

「造短」No.10から工作・彫塑領域の指導実践例を図解による提示が特筆される。No.11から松島輝男先生(てる緒)の「色は匂へど」シ

リーズが登場した。造短編集企画のアイデアを評価するところである。加わえて、昭和52年6月26日第1回裸婦デッサン会を実施したことは、会員の意欲に興味と関心を深め新しい歩みを進めたものと思うのである。

また一方では、新指導要領との関連性を考えた提案がなされるなど、まさに「造形財産蓄積の時代」と云えるだろう。

第30回全国造形教育研究大会に結集した連盟の仲間や、大会を支えた数多くの札幌の仲間、敬意と信頼のこぼれを耳にし、更に造形の実践を深め、人の和をひろげようと、札教研工部の世話役をしていた53年春、「連盟支部の仕事も同時にやりなさい。」と辻悦平委員長の不すめにより、側瀬宇太郎支部長のあとを引き継ぐこととなったのである。

事務局長に岩間謙仁先生(二条小)。正確迅速な運営が「造形教育」No.15以後の編集や庶務会計に見られる。今、最大の悩みは、会員名簿はあるが、会費が入ってこない。特に中学校と幼稚園。と彼の心配性が金脈一事に結びついているといえるのである。

伊藤暢紀先生(附属小)は、短信や例会にフレッシュなアイデアを提供してくれている。No.16から技法コーナーを新設し、会員の多

様な要望にこたえ、更に、新人紹介コーナーに新会員の抱負をPRするなど、支部活動を多彩に特色づけようと試みている。

裸婦デッサン会を教育文化会館で成功させたのは、高杉正和先生（新川中央小）例会でも熱っぽく造形実践を語る人。過労が重なり入院加療の結果をもたらしたが、今は全快に近い。しかし支部の重責をこれ以上続けていただくことは、いっそう苦境に立たせることと考え、必要欠せざる人であったが、吉田倭雄先生（西野小）とバトンタッチ。その初仕事第3回裸婦デッサン会。「年3回→4回の実施をしたい。」と早くも意欲を見せている。

今 裕子先生（南月寒小）は、9・12・4・6月の例会の新しい推進力となり、新指導要領移行期の実践発表を主に企画しその成果は大きいものがある。

造形教育支部短信「表紙のレイアウトは、岩間謙仁事務局長により、いっそうフレッシュになり、P8編集となった。

昭和54年度の支部活動は、下記のようなものが計画され、実践されてきた。

◎造形短信

- 第17号（4月）造形あそび特集
- 第18号（8月）造形教育旭川大会特集

活動の横のつながりをも意図した実践討論会すなわち「全空知子供の作品を語る会」を39年秋、栗沢町で開催、毎年各地をめぐり40年代から50年代へと引き続き昨年、砂川大会では、十六回を数えるに至った。発足に当たってこの大会の主旨を次の様におさえていた。「この大会をあくまで『子供の作品を語る会』とし、従来のように形式ばったきゅうくつなものではなく、教室の中で作られた子供の作品を中心に参加者が自由に意見を述べ、感想を語り合い、討論しながら自己の研修を高めるものである。経験の浅い深いかかわらず、だれでもが自由に参加出来るように、新鮮味のあるものにしよとする。」と。

この作品を語る会をして、必然的に誕生させたのが「空知美術研究会」と言う民間教育教育団体で、43年に発足したのである。従って「全空知的なつながりを持った仕事」をやっているうちに組織が出来たと言うところはこの会の特質がある。「作品を語る会」と言う実践的な実践活動からみて、16年間の歴史と

いってもよからう。空知の風土に根ざした新鮮な美術教育を担うとして、「人間としての豊かさ」を、追求した過去16年間を、創設期、発展期、充実期、激動

- 第19号（10月）わたしの年間計画（新指導要領実施に向けて）
- 第20号（1月）教育美術展・立体造形展特集

◎例会

- 1回目（4月）造形あそびの実践発表
- 2回目（6月）移項にともなう実践発表

- 3回目（9月）裸婦デッサン会
- 4回目（12月）幼稚園・小学校対象の造形実技

札幌支部活動の課題は、幼・小・中を通じて共通の問題点を基点に交流の場を広めることにある。札幌研工部の仲間であり、連盟の中核となる仲間であるダブリの意識はとりのぞけないが、支部活動を通して、多くの有能な新人達との輪を広げ、札幌の子ども達により豊かな造形の喜びを感じさせたいと願うのである。



期に大別し、それぞれ一つの転換期としておさえた。

創設期（昭和39年～昭和42年）

二九年の春、全空知美術サークル委員長として活躍していた、山本栄蔵氏（現・夕張遠幌小）一の戸信雄（現・奈井江白山小・現語る会々々長、本田哲也氏（現・由仁町三川中）が滝川市に集り、空知の交流を深める為の語らいの場で発案し、秋10月南空知サークル委員長、本田哲也氏、副委員長、三浦恭三氏ら

空知地区



寺谷 安雄  
（滝川・明苑中）

去る53年8月、空知美術教育研究会創立十周年記念ゼミナールを最北端幌加内町で済ました。そして54年9月砂川市に於いて「全空知子供の作品を語る会」第十六回大会をも多数の参加を得て盛會裡に終了する事が出来た。さて、戦後の空知に於ける美術教育運動は、諸先輩の同好的交わりによって育てられ、その後、北海道図画工作連盟の発足と共に、北教組文教部との提携のもと、昭和27年10月、南・中・北空知といった連盟支部が誕生。30年代は、組合教師を軸とした各市町村、各地区サークル活動が活発に行なわれた。

又、空知管内の教委連、校長会、空研、北教組という四者協議体による教育課程研究等も毎年開かれていた。40年代は、空知三地区

によって「空知子供の作品を語る会」要項を発行。11月栗沢小学校を会場に二百人の会員を集め堂々と第一回をかざった。テーマ「むすび合い、みがき合っていく空知の美術教師なかま」を原点とし、全空知に偉大なるエネルギーをそそいだ。第二回滝川大会では、「百人の一步前進、みんなの百歩前進」をテーマに着実に仲間をふやし、美術教師ならではの「風変わった話らしい。一千点近い作品の山に囲まれ、もう幾年も以前から知己同志の課題の如く花をさかせた。第3回深川大会。第4回北村大会と。しつかりした仲間作りと「語る会」を全空知に定着のきざしをみせていった。

発展期（昭和43年～昭和46年）

昭和43年春、過去4回の大会を土台に、「空知美術教育研究会」と称し、確実な民間団体組織を築き上げた。初代会長、東出芳夫氏、事務局長、一の戸信雄氏就任。第5回、「語る会」芦別大会では、はじめて「共同制作」を取り上げ、その授業のかまえと指導課程」をテーマに、ベニヤ十枚組大の描画や一人で動かせない立体作品など体育館狭しと展示空知教師仲間のまの「力量」をフルに発揮した。

第6回納内大会「上手な絵を描かなくても

よい、元気に描く子供」第7回美唄大会「創造する空知の子供」第8回岩見沢大会「感動を表現する子供たち」と。あくまで子供を知り子供を生き生きとした造形活動に導く為の感動を引き出しに留意し、問題点を深く掘り下げ、悩みや、解決の方向を見つけて出していた。昭和44年、二代目会長、本田哲也氏、事務局長、和田竜郎氏就任、昭和46年、三代目会長、徳梅英次郎氏、事務局長、和田氏。充実期（昭和47年～昭和50年）

第9回栗山大会「子供の創造力を高め、生き生きとした表現をさせる指導課程」をテーマに公開授業を取り入れ実践にふみきった。

第10回滝川大会「心をゆきさぶり、喜びと意欲に満ちたとりくみを求めて……」作品と写真の比較研究やパネルディスカッションを通しての教師側の研究を深めた。第11回雨竜大会「描写指導に限定して」学年段階に即応した表現活動を求めて。第10回をピリオドとし、「原点にかえれ」を合い言葉に描画だけにしばった話し合いが、かえって深まり日常的にさせた。第12回由仁大会「生き生きとした表現を求めて」——感動の開発と構想力を高める指導のころみ——。造形的にも物を見、発想に基づいて表現するまでの間に構想がある。

ととらえ、VTR、スライドOHPなど教育機器活用をはかり、指導場面再現の具体化の研究を進めた。

激動期（昭和51年～現在）

第13回岩見沢大会、第26回全道造形教育研究会がこれに変わって実施、テーマ「すべての子供に造形のよろこびを」を全道に広げた。「古くて新しい命題に向けて」の事務局長早弓弘行氏のかけ声に、全空知のつわものがたちあがり、充実された12回までの積み重ねがここに終決した。

14回奈井江大会、テーマ「土に生きる子供の造形」——感動のほりおこしと題材のみなおし——空知っ子の土根性をさぐり、根底として「土に生きる教師」が問われた。教育を子供に返すと言った、直面する教育課題に真正面から取りくむものであり、子供の為の造形を人間性回復の願いに立った研究と言えらう。第15回幌内大会ではテーマ「土に生きる子供と教師」パート2とし、残された美術教師のあり方をさぐり、深める為のもので子供と教師の共通した目を養った。空知の子供と教師の根性の見おしに至った。

第16回砂川大会「感動のほりおこしから豊かな創造へ」——豊かな造形性を育てる指導

12月であった。

二十数校37名の先生方が実行委員としてののり出、子ども作品を中心とした自由討論による研修場面として単なる展覧会に終らず図工教育諸問題説明に貢献するとともに、より多くの教師や父母の理解や相互の交流を願って発足された。

第一回大会が昭和45年11月22日それまでの幾多の難関を克服し、留萌市に於いて開催された。大先輩である空知語る会の和田事務局長も姿を見せていただく。

ゴザに座って文字通りの車座、貼りきれない数々の作品をも含めてデスカッションをする。この第一回の反省会で強調されたことは「作品を語る会」を会の名称とし、この会が主催する研究会として管内規模の「全留萌子ども作品を語る会」を毎年、希望町村で開催することとした。独自の立場をとって、名実ともに管内の自主研究会として、純粋に子どもと図工、美術の教育をとりあげる研究団体として発足することになった。

「たくましい留萌っ子」を母とし「たくましい留萌教師」の集い。

「たくましい子ども」のテーマは「どのようにしたら子どもが喜んで絵を描いたり、物

をつくりたりするようになるか」を追求する

意図と、その上に加えて「粘り強く深く追求する子どもはどのような子供のか」ということへの追求を期待する。従い、人間の生き方、在り方を追求する面と造形的表現を追求する面とが課題となっている。

前日の夜は、実行委員その他希望者による合宿をもち、交歓会を催す中で、今までの語る会の模様をスライドで振り返ってみたり、良い作品の鑑賞会、互いの近況やら実践を話し合い、次第に熱っぽさを増す。とに角、図工の仲間には「さむらい」が多い。互いの研究もユニークで黙々とした実践もさることながら、夜の活躍がすばらしい。これが楽しみでの集まりでもある。お互いにおつきり合い語り合うところにそれぞれの個性を十分に発揮した、はだのふれ合いがあり、協力的指導体系が生まれる。きたえ抜かれた集まりといえよう。

46年羽幌、47年増毛、48年天塩、49年小平50年苫前、51年留萌と持ちまわり開催されてきた。これまで大会運営の方法も手づくりの中であったが、各町を巡回、研究交流の場を提供し、ユニークな運営と内容をもって関係方面から評価されてきた。しかし、運営のな

法を求めて——今一度原点にかえり、子供と教師が一体となって創造性を養い多角的な指導法と子供の創造性、思考にメスを入れた。

この16年を通して「むすび合い、みがき合っていく空知のなかま」をあいことばとし、「すべての教師、すべての子供に造形のよろこびを」を掲げたいと願っている。

地味で、やりきれぬほど長い道と覚悟をしているが、又今年も次の会場でくりかえすとだろう。ひざをよせ集め語り合う為に。

## 留萌地区



佐々木 忠

(増毛・増毛小)

南北に細長い北辺の留萌連盟傘下としての地方的組織固めのための「全留萌子ども作品を語る会」を発会するためのアツピール、橋場私案（藤山小教頭）が管内すべての学校に流されたのが、ちょうど十年前の昭和44年

やみとして七十余名の会員はいるが、顔見知りの先生方は勿論のこと、管内一般の先生方が続々と集まって赤禪々に「語り合う会」となるよう期待するも参加人員が毎年少ないことである。

また、この会の実践活動の中で浮き彫りにされてきた問題もあり、この会が発生し、初回の開催地、故郷の留萌市に戻るこの機会に主催団体である「留萌地方美術教育研究会」が、その組織の改革をはかり、研究団体とし



ての性格を強化し、これまでの事業開催だけを目的とした実行委員会はこの新団体に吸収することにした。また市町村におけるサークルや研究団体とのつながりを確立するために変革されたわけである。これまで初代会長としてこの会発展に尽力された橋場昌三先生から、加藤正先生(初山別中学校長)に引き継がれ、この団体としての研究活動並びに事業を促進するために三部制がしかれた。

○研究部―研究主題の分析と発表。研究会の企画立案と推進。広報部との連携。  
○事業部―通称「語る会」の企画立案と開催準備推進。広報部との連携。

○広報出版部―会報、研究誌などの発行並びに画集出版の構想、企画、展望。  
管内南、中、北の三ブロックにて、それぞれを担当運営することになった。

研究主題も設定された。  
「たしかな表現力を、みんなはどう育てるか」  
I、造形表現力をイメージにどのように結びつけるか。  
II、郷土留萌に根ざした教材の開発と精選

本団体発足以来、初めて研究主題を掲げての授業を中心とした第一回研究会を開催することができた。53年2月、留萌東光小を会場

(教えることから育てることへ)

と研究主題が設定されたが、更に、この研究をより具体化させるために、時代の要求も考えあわせ昨年度より

「生き生きとした、ゆとりある子どもを育てる図工、美術教育のあり方」にかり、その重点もつぎのように変化してきた。

◎子どものくらしに深くかわる題材、しごと、材料を、子どものくらしに立ちいつて見つけだし、授業を組み立てていこう。

更に、この重点をより具体化させる上で、小学校、中学校共に一丸となつて

●子どものくらしの見直し。  
●観点にそつた題材えらび。  
●教師の教材解釈の明確化。

●系統関連の明確化(たて、よこのつながり)以上の視点で研究は行なわれてきた。  
本年度、第29回全道造形教育研究大会に於いて、その具体的研究の内容は示されているが、研究テーマにかかわる内容は、これから更に深められていくものと考えられる。

○運営の概要  
旭教研、図工美術部の運営組織は過去数年五つの委員会制をとっている。



場としての授業、発表会であった。外部からの参加人数は予想をはるかに下回ったが、しかし、本団体発足以来、労苦を共にした者にとっては記念すべき年であった。この年9月には、第八回「語る会」を遠別に於いて開催。連盟からは、佐藤吉五郎先生を招いて実技講演会をしていただく。残念なことは、第二回研究会を11月に計画したが諸般の事情により中止されたことであつた。

ともあれ、身近な関係機関の絶大な応援をいただき、多大な成果を挙げつつあることは本会を発展させる上での明るい展望が開かれているものと見ることができよう。

今後は、三つの専門部を三ブロックに当てはめて担当することになつていすが、地区ブロック理事者の間での主導権を明確にし、会員個々の自覚をうながし、これらの仕事を永続させるために、特定の個人に頼るのではなく衆知を集めて、その積極性、自主性と共に存分に創造性を発揮し、本団体ならではの独自の性格をもつた活動が望まれる。

それぞれの活動が自主的に活発に軌道にのり運営されていくには、まだ二、三年はかかると思うが、教育の道は遠い。我々はあせら

- 研究委員会  
部の研究方向および研究テーマ、研究の重点、研究体制、研究に係る一切、編集委員会  
●編集委員会  
部報の発行、研究実践を収録したプロセスの発行、資料の収集整理保管  
●研修委員会  
指導技術の向上のため各種実技研修会の企画、推進  
●事業委員会  
児童、生徒の各種作品展の企画、推進  
●特別委員会  
各種行事のPR、各種作品展審査

# 旭川地区



渡辺 正勝  
(旭川・知新小)

## ○旭川の研究テーマ

我々が毎日の実践の中で求めていることは「いまある子どもをどのようにとらえ、どのような方向に育てるか」ということである。

このことは、旭川だけではなく、全道各地区に於いても共通して言える。

そのためには、お互いの実践を持ちよつて研究を進め、実践の積み重ねの中から理論を生み出すことを基本として研究を推しすすめられてきた。

従つて「研究主題」も「未来に生きる子どもの造形能力を育てるプログラム」

●造形能力を育てるための教材内容の精選化と学習過程のあり方について、特に、教材相互の関連を考え、積み重ねのある学習。

以上の通りの委員会に部員がそれぞれ所属して活発に研究活動を行っている。とりわけ旭川市内、図工美術教育に対する熱心な先生方一二七名の構成である。

## ○研究の足跡 プロセスの発行

第20回全道造形教育研究大会を軸として、以後、毎年その年度に実践した研究内容を一冊の本にまとめて足跡をのこしているものにプロセスの発刊がある。今年でその発刊も九回になる訳である。唯一の部の特色である。

## ○旭川の主な行事

各種の展覧会関係では、恒例の「旭川市小学生作品展」「旭川市中学校連盟作品展」がある。この作品展はコンクール形式を用いない唯一の作品展であり、参加した学校が作品がそのまま展示され、出品する段階で教育的に配慮されたものであり、各校の独特の個性が表われて見えたえのある総合展であり、コンクール形式への反省を促す警鐘となつているものである。

「旭川市小中学生版画展」は今年で十八回目を迎え益々健在である。応募点数も毎年三千点を上回わり、内容も年々その水準が高くなってきている。審査方法も、特定の審査

員を決めず、各校一名以上の教師が自主的に参加し審査に当たっている。版画だけの展覧会は全国的にも珍しいものであり、会場では一般向けの実技指導コーナーも設けられ地域の人々の好評を得ており、当市の作品展を特徴づけるもの一つとなっている。

「旭川市児童・生徒絵画展」は十六回目を迎え、五年前から始められた「立体造形展」と合わせて一年間に開催される展覧会のビッグ、フォーに位置している。

その外に、児童動物画コンクール（旭山動物園）。科学の夢を描くコンクール、旭川市児童・生徒模型工作コンクール（青少年科学館）。冬を描く児童・生徒絵画展（市企画部）読書感想画コンクール（図書館）買物公園図書館コンクール（買物公園企画委員会）など枚挙にいとがながないが、広く地域社会との関連を深めながら郷土に対する認識と理解を深めていく一助となっている。

その他、市の教育研究会国語部会で発行している文集「旭川の子供」に使用されるカット作品の貸与、さらに国際的なレベルで友好親善に使用される作品の提供、新聞社への作品貸与などがある。

次に教員を対象とした研修活動があげられ

したり、行事をもつたりすることがたいへんなことなので、その活動は、各市町の幹事を中心に展開されている。

この十年、根室造形教育連盟として取り組んだ活動の主なものを見てみると、各市町の児童生徒作品巡回展・人物画実技講習会・会員の海外研修参加者報告会・巡回道展鑑賞会・現辻委員長（当時事務局長）をかこんでの花咲がにをつつきながら造形教育を語る会新教育課程について移行措置をはじめとする図画工作・美術の研修会、そして昨年は、伊藤忠先生をお迎えしての紙工作実技講習会等がある。

また、各市町の活動として、根室市では絵画の研究に主力をおき、会員を中心に広く絵画サークルを結成し、定期的に展覧会を開催している。中標津町では、版画の制作の普及活動、別海町では、彫塑や七宝焼の研究、標津町では、恒例となった造形まつり、羅臼町では、共同制作等、会員の努力で各市町毎に特色のある造形活動がおこなわれている。そのことにより、管内として造形教育に対する関心の高まりをみせてきているのは、うれし

いことである。

根室造形教育連盟の運営については、釧路

るが、この十年間に実施されたものをかいつまんであげてみると、焼成の基礎理論と実習「版画」陰刻多色刷り、リノリウム版画、板紙版画、スチレン版画、シルクスクリーン。

「木材工芸」彫刻刀、糸鋸、塗装の基礎実技「彫塑」粘土、石膏の扱い方の基礎、七宝焼きの用具と素材。裸婦デッサン、これは昭和四十六年から引き続き行われている。「嵐」「紙彫刻」「水張り」とレタリング」「折り紙」「粘土の芯材の作り方」着色剤について「紙版、木版の製作」などがあげられる。又、講師も

図工・美術の先生方はもとより、工芸家、教育大教授、日本風の会々員、林産試験場員とハラエティに富んでいる。

以上、事業、研修活動について書いてみたが、これらの活動の下地となっているものは単に教師の情熱や不断の研鑽にのみあるのではなく、教育の場を離れた所で活躍している各種の美術グループ、頻繁に行なわれている各種の個展、そしてその仲間相互の深まり。又、市内の各所に見られる彫刻像との無言の対話など人々のつながりや環境が我々の活動の大きな支えとなっている事も忘れる事は出来ない。



市の小山田先生をはじめ、道連盟の各年度の役員の先生方に、随分と御指導御助言をいただいております、会員一人一人から感謝申し上げます。

この十年の間には、会員としてその力量を十分發揮し、根室造形教育連盟のために活躍された明見先生（十勝・通明小校長）、亀浦先生（網走・米蓮小教頭）、中村先生（石狩・若草小）、山元先生（十勝・土幌中）、堀田先生（釧路・桂恋小）、鈴木先生（渡島・矢越小）

# 根室地区



川野上 彰

（別海・中央小）

根室管内は、根室市・別海町・中標津町及び標津町・羅臼町の一市四町で構成されている。北方領土を目前にした厳しい状況の中でありながら、北海道らしい風土を、随所に残した香い息吹きを感じさせる土地柄である。

各市町には、それぞれ教科別の研究サークルがあるが、かつては、管内を統一した教科別管内サークルがあつて、年間数回の会合や行事を推進してきたものである。当時の図美サークルが、そのまま全道の造形教育連盟につながっていたのである。その後、管内サークルが解散して、各市町の造形教育に意欲をもつ者同志が結束し、現在の根室造形教育連盟が誕生したのである。しかし、広い管内でもあり、容易に連絡を取りあつたり、会合

の転出は惜しまれてならない。それぞれ新任地で、活躍されていることを耳にし喜んでいる。ますますの健闘を期待して止まないものである。

十年の間の全道造形教育研究大会には、提言や司会として、岩田先生や桐沢先生、細見先生や大黒先生、鈴木先生や中村先生等に御苦勞をいただいたのも、記録にとどめておきたいことである。また、根室教育局の清水克美先生が、根室市の北斗小学校の教頭として現場に復帰したことも、これからの根室の造形教育の発展のために、大いに期待できることである。

今のところ構成人員は限られた人数ではあるが、高まりつつある造形教育の機会をとらえて、会員の増員を図り、各市町の研修交流をさかんにし、根室でも全道大会が開催できる土台づくりをしたいものと、会員相互に語りあっている。

造形教育の振興こそ、心にゆとりをもつ人間性豊かな児童生徒を育てることにつながる。であると確信し、前進したいものである。

# 北海道教育 美術展の あゆみ



「ラボール・北海道教育美術展」

北海道造形教育連盟がはじめて主催する、  
望望の「第1回北海道教育美術展」が年を明  
けた1月17日から21日までの五日間、さっぽ  
ろ東急デパート9階催場で開かれました。

昭和50年という極めてきりのよい年での幕  
明けは連盟にとって今後記念すべき年となる  
ことでしょうか。ここに至るまで、委員長をは  
じめ事務局、事業部を中心にした各常任委員  
の校務をさいての協賛団体との接渉、実施要  
項の検討、募集についての実務等、幾多の会  
合の積み重ねが、こうして花を咲かせたこと  
を互いに喜び合いたいと思います。」

この文は連盟の機関紙造形教育(52号)の  
トップに記載されているものである。

これによると当時、教育美術展がいかに苦  
勞して産みだされたものであったか、また、  
幾多の難関を経て美術展開催にまでこぎつけ  
たか、当時の関係諸氏の喜びがひしひしと伝  
ってくる。

あれから6年、この教育美術展も回を重ね  
今年5周年の記念美術展を開催するにまで  
至った。

当時の記録をひもといてみると、開催の趣

旨として次のことがあげられている。

- 美術教育振興のため連盟の果していく役割をさらに充実し、研究面だけでなく組織の面からも強化を図りたい。
- 全道各地の実践から生まれた作品を広く集め、その秀れた内容を展示するとともにその実態を確かめたい。

- 道内美術教育の今後の課題を把握し、連盟の研究主題を実践に反映させたい。

以上の趣旨のもとに、とりあえず初年度は全道的規模での公募という形をとり、具体的には平面的外品(絵画、版画、平面デザイン)のみを公募し、選考、展示することとした。さらにこのような全道的規模の教育美術展を開催しようとする気運の盛りあがった背景には、

- これまで全道の美術教育に大きな役割を果して来た道展主催の「子供道展」が発展的解消をとげ、これに替る全道規模の子供の美術展がなかつたこと。
- 株式会社サクラクレパスが社の経営方針のひとつとして全国各地で県展を応援しており、北海道も応援したいという申し入れがあったこと。
- 当時、札幌に進出して来た東急が地方文化

の振興に寄与するということで全面的に協賛してくれたこと。

- など好条件があったことも今日の成功に大きく貢献している。

かくして道教委の後援を得て第1回の審査が札幌西野小学校を会場に行われたが、全道から87校(幼12、小64、中12)が参加し、八三〇〇点余の応募があった。

審査にあたっては

- 日常学習の中で最も推奨できるもの。
- 児童、生徒の造形学習の刺激となり、意欲化できるもの。
- 同じ傾向から多彩な表現へと目をむけること。

- 推奨作品については、一つの地域に片寄ることなく選ぶよう努力すること。

- 作品を選ぶ行為を通して学ぶこと。

の基本線を確認しあい、奨励賞一〇〇〇点、入選四〇〇点を厳選した。なお、奨励賞については努力した点を記入し、文字どおり今後の学習の励みとなるよう教育的配慮がなされた。この審査の基本線は今日に至っても変わることなく継承されている。

記録によれば

回	参加校	応募総数
第一回	八七	八三五
第二回	九六	九五二六
第三回	一四三	二〇四〇七
第四回	一七〇	二二七七
第五回	一七一	二二〇六
第六回	一九六	二九三三

と、回を重ねる毎に参加校、応募点数とも増加していることは大変喜ばしく、特に幼稚園保育園の意欲的な参加には目を見はるもの等がある。さらに、数だけではなく質的に見て非常にレベルが高くなり、単に技巧だけにはしる作品が影をひそめ。

- 素朴で子供の心がにじみ出た作品。
- たくましく生き生きとした作品。
- 明るく、大らかな作品。

が数多く見られるようになった。また、各地のレベルアップがはかられ、地域による差がなくなったことも特筆すべきことである。

第3回展からは北海道新聞社にも後援をいただき、PR、受賞者の発表などに大いにその力を発揮していただいている。

応募総数の増加にともない、入選数も七〇〇点にふやし、五回展からは準入選(三〇〇〇点)も審査に加え、より多くの子ども達に受賞の喜びを与えるよう配慮している。

このように教育美術展が連盟の事業として確立し、ゆるぎないものになったのは、全道各地で活躍される岡工の仲間の熱意と道教委をはじめ道新、協賛商社各位のご厚意の賜ものである。また、我々の事業とはいえ、毎年冬休みのいく日かを返上して、審査及び諸業務にあたる在札の常任委員の努力に対して深く敬意を表したい。

展覧会が終るとすぐに奨励賞はじめ、入選作品が次々と全道各地に移動され利用されているのを見ると、関係諸氏のお力添えをいただき、さらにより良い美術展になるよう努力したいものである。

(鹿島 健・札幌・篠路小)

# 全道「立体造形展」

「全道小中学生立体造形展」はオイルショック後俄に見なおされていた「手づくり」ブームのさきがけとして昭和51年読売新聞道支社と北電の共催で始動した。

第1回展は、諸準備の都合で年を越し、昭和52年2月に行なわれた。

全道4地区で集めた作品のうちから、それぞれ20数点ずつの代表作品を選び、札幌地区の入選作品とともに札幌松坂屋に集めて、全道展とした。第2回目、昭和52年秋、第3回目昭和53年秋、第4回目昭和54年秋と、それぞれ文化の日を中心に行い、第5回は55年秋の予定である。

「手づくり」が主眼の展覧会ということだったから、はじめは木工や金工主体のどちら

かといえば「発明工夫」に近い感じの展覧会になりそうであった。それが今の形、つまり小学校の図画工作科、中学校の美術科の中で立体作品群に選ばれたのは、実施にあたっての打合せ会に、この造形連盟常任委員が加わったためである。

これは、企画に当たった読売新聞道支社広告課の白鳥課長、長瀬係長などの積極的でしたか、柔軟な考え方と、連盟側の「立体造形展」

実現への熱意とによるものであった。いよいよ学校にちらしが配られて動き出すと、連盟もさることながら、読売新聞広告課は挙げて作品の搬入、審査会場の雑用等に、真摯、誠実、積極的に動き、連盟側はただ感謝した。



勿論、連盟は連盟で、作品の広募に協力する一方、審査と作品記録など主な業務を行っていたわけである。

おそらく、そうした札幌の動きにあわせて旭川、釧路、室蘭、函館の各地区でも、読売新聞広告課員を中心とした、読売新聞販売店や北電の地区電業所などのおしみな協力があつたにちがいない。

その意味で「手づくり」のイメージに従って生まれた立体造形展は、展覧会を「手づくり」することになったといえる。

連盟が「立体造形展」を思い立ったのは、すくなくとも昭和35年位かと記憶する。当時は、いままもそうだが展覧会といえども平面的なもので、中でも絵画に偏っていた。



当時、寺井信一学芸大学教授ら造形センター関係者が、作品展を強く希望して、結局は断られたが、ある銀行にスポンサーとしての協力を願ったこともあつた。

また、新たに造形展が企画されると聞くと何とか「立体作品」の入る余地がないかと意見を申し出たりもした。だが、いつも最終打合せの段階で「立体の輸送困難と、破損のおそれ」がネックになって退けられつづけた。

立体造形展の第一日目に高橋連盟委員長が「長い間、希ってできなかった『幻の立体造形展』がいまここに実現した」とあいさつしたのには、そのような苦渋の年月があつた。



さて、第4回展がふたをあけたとき、ヨーク松坂屋の八階に集まった人達が見たものは旭川をはじめ4地区が、札幌地区の作品に格差を感じさせなかったことであろう。

正直の話、第1回から第3回まで、ともすれば札幌の作品ばかりが目立つ展覧会であったのが、第4回ではその差を感じさせないのであつた。一つのレベルをもつようになったといつてもいいわけである。

これは、明らかにこの展覧会の効果であつた。長い間、平面作品の陰に閉じこめられていた立体造形の殻を、この展覧会がみごとに切りひらいたのであつた。



立体造形展は成功した。

「鉛筆が削れない」ということばがはやっている。そのことだけを考えれば、さして問題ではない。だが、子ども達に「できた」と判断し、歎息する場面をあたえらるとしたらこれほどに重大な意味をもつ作業もない。

かつて、今日ほど子どもの造形を大切にしなければならぬ時代はなかった。立体造形展のためには祈る。

(伊藤 恵)